

Title	ベルクソンの直観と概念の再編成
Author(s)	中村, 雅之
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1990, 16, p. 201-219
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7245
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ベルクソンの直観と概念の再編成

中 村 雅 之

序

1. ベルクソンの直観は何を拒否するか
 - (1) 内からの、あるいは直接的認識
 - (2) 記号
 - (3) 社会的概念
 - (4) 言葉からの解放
2. 実用的思考の治療
 - (1) a. 無意識
b. 人類愛
 - (2) 二項対立の融和
 - a. 拡がりの度合い
 - b. 存在の二条件
3. 逆転された問い
4. 結 論

ベルクソンの直観と概念の再編成

序

ベルクソンの直観の営みとはまさに（哲学的な）言語表現の治療である、とえば奇異な響きがするかもしれない。ベルクソンの直観は非言語的な認識であるとしばしば論じられてきたからである。例えば、次のものはそのような解釈の典型例である。「ベルクソンやプロティノスのような神秘的直観の哲学者たちがいて、彼らは、言語は根源的真理を定式化するには適さないと考える。この立場からすると、真理をほんとうに把握できるのは、実在と言葉なしに一体となる場合だけである」¹⁾。ここでは、ベルクソンの直観的方法が実在との「神秘的な」言葉なき一体化であると解されている。次のような例もある。「ベルクソンは、一種の哲学的なはぐらかしによって、概念から、二律背反から、思弁的な思想体系から逃れることができると考えた」²⁾。あたかもベルクソンが「概念一般」を免れようとしたかのよう語られている。最後に、D. エメットは、自然言語は実在の流動を固定してしまうというベルクソンの考えに触れた後で、こう述べている。「ベルクソンの治療は、自然言語にかえて直接的な、非言語的直観をもってくることであった」³⁾。ベルクソンの著作全体を通して言語に対する不信が執拗に繰返し表明されていること、彼が直観について語ったことが一見すると上のような解釈を導くように思われること、こうした理由から直観とは言語から脱却して対象と直接共感する営みである、という捉え方が自然であるように思える。しかし、ベルクソンの直観は言語的認識一般を拒否するものではない。ベルクソンの直観が拒否するのは、特定の概念、特定の記号、特定の言語に限られるのである。それどころか言語による認識（実用的思考法）の欠陥を概念あるいは言語表現の治療によって矯正し、実在の認識を可能にすることがベルクソンの直観の課題であった。本稿が提示するのは、この解釈である。そして、この解釈の提示によってベルクソンの直観的方法を脱神秘化することが本稿の目標である。

さて、この作業を進めるには「有用性」という観念に焦点を合わせる必要がある。ベルクソンが、直観的認識を要請するのは、われわれの通常の認識が基本的には「有用性の観点」からなされているからである。ここで有用性の観点とは、事物に対するわれわれの行動を導き、われわれが事物を扱うのを容易にするような観点のことである。ベルクソンは、言語、概念、記号、知覚などはすべて功利的起源をもつと考えた。それゆえ、彼がこれらの用語を

用いるとき、その一つ一つが「功利的」という形容詞を暗黙のうちに伴っているとみなすべきである。有用性の排除が、ベルクソンの言う直観的認識の出発点であった。この出発点は、次のように定式化することができる。「実在に関するわれわれの経験的認識のみならず思弁的認識も、有用性という目的のためになされており、この目的に合わない部分は切り捨てられている。したがってこのような認識によっては実在の一部しか把握できない。それだけではなく、このような認識を哲学のうちに無自覚にもちこむと、解決不可能な疑似問題が生み出される。」彼の概念、記号、言語に対する批判は、すべてそれらが担う有用性に向けられている。この点を見落とすとき、概念その他に対する彼の批判も、ひいては直観的認識の本性を決定的に見誤ることになるだろう。そこでまずこうした誤解を取り除くための予備作業から始めることにしたい。われわれは第一節で、ベルクソンの直観は、厳密に言って、どのような言語、どのような概念、どのような記号を拒否するかを問う。次に、哲学的疑似問題を生み出す実用的思考をベルクソンの直観はどのように治療したのか、これを第二節および第三節で検討する。第二節では分類の再編と二項対立の融和を、第三節は問題の再定式化を扱うことになる。

1. ベルクソンの直観は何を拒否するか

ベルクソンが提唱する直観的認識は、厳密に言って何を拒否するのか。この点を明らかにすることは、彼の直観を理解するためには不可欠の予備作業である。しかし、従来この点が十分になされていなかったために、すでに見たような誤解が数多く生みだされてきた。これらはいずれも、ベルクソンの直観が、厳密に言って何に異を唱えているかの検討を怠ったために生じた誤解である。上の三つの引用は共通して、ベルクソンの直観は言語や概念を拒否する営みである、と解している。たしかにこの見解を肯定するように思われる叙述はベルクソンの著作中に散見され、それはとりわけ『形而上学入門』（以下、『入門』と略記）に数多く登場する。『入門』の記述をもとにしてベルクソンの直観を、最も簡潔な形で定式化すれば次のようになるだろう。「直観とは、概念や記号に頼らないで、対象を内からそれ自体において直接的に把握する認識の様態である。」ベルクソンの直観が論じられる際、しばしば上のような誤解を招く用語が、この定式にはすべて含まれている。そこで、そうした用語を一つ一つ取り上げ、その含意を明らかにすることによって、あらかじめありうる誤解を退けておこう。

(1) 内からの、あるいは直接的認識

『入門』では、分析とは対象を「外から」捉える認識であるのに対して、直観とは対象を「内から」把握する認識であると述べられている (PM, 177-8)。この「外からの認識」対「内からの認識」という対比を正確に捉えるには、これが有用性という観念を中心にした対比であることを理解する必要がある。「外からの認識」とは、事物に対してわれわれがどう行為したらよいかを告げるような認識、言い換えればわれわれの実利に奉仕する認識である。それは「一定の利害を吹き込まれた認識の様式、そして定義によって対象を外から眺めることで成り立つ認識の様式 (PM, 200)」である。ここで、「内からの」認識とはわれわれ自身の心を内観によって知ることを意味しない、という点に注意しなければならない。われわれは外的事物を「外から」認識するが、われわれ自身の存在は「内から」直接に把握するというような語り方がよくなされる。またベルクソンもこのような対比を念頭に置いているかのように受けとられがちである。しかしベルクソンは、われわれは自らの内面をも日常的には外からしか、言い換えれば実用的観点からしか認識しないと考える。「われわれは事物とわれわれとの中間地帯にあって、事物の外側に、またわれわれ自身の外側に生きている」(R, 118)。したがって、内からの認識は、内観による認識を必ずしも意味しない。「内から」、「外から」という対比は、認識の対象ではなく認識の様態にもとづく対比である。

以上から明らかのように、内からの認識とはまず、有用性にもとづく観点を、すなわちわれわれの実用的利害にもとづく観点を排除した認識である。この認識は後に見るように、既成の、社会的概念を退ける。

「直接的 *immédiat*」という形容詞も同様である。直接性は有用性に対置される。われわれの日常的経験は「直接的」経験ではない。われわれの外的経験の源泉である知覚が、すでに有用性によって歪曲されているからである⁴⁾。知覚は、事物に対するわれわれの有効な行為を導くように事物を裁断する。言い換えれば、知覚は事物を功利的な観点から分類しており、われわれの日常的な語彙はこの分類を表現している。直観的認識へ至るには「経験の曲り角とでも呼べるものに身をおき、直接的なものから有用なものへの移りゆきを照らし出し (MM, 206)」そこから直接的なものを再構成しなければならない。直観的認識は、このような功利的分類の排除を目指す。それは、日常的語彙が表現する、功利的視点に基づいた事物の分類を再編成しようとするのである。ここから明らかのように、直接的認識が退けるのはただ功利的分類を表現する実用的語彙に限られる。したがって直観は、およそ言語を媒介せずに事物と合致しようとする認識の様態ではない⁵⁾。

(2) 記号

「第一の認識は事物の回りをめぐり、第二の認識は事物のうちに入り込むことを意味する。

第一の認識はわれわれが位置する観点と表現のための記号に依存する。第二の認識は、いかなる観点もとらず、いかなる記号にも支えられない」(PM, 177-8)。

しばしば引用される『入門』の一節である。第一の認識が分析と呼ばれ、第二の認識が直観であることは言うまでもない。『入門』だけを読めば、ベルクソンの直観はあらゆる記号を排除する、という解釈も妥当であるように思えるかもしれない。しかし、『入門』以外の著作で「記号」が登場する文脈を追ってみると、ベルクソンは「記号」という語をきわめて限定された特殊な意味で用いていることが分る。彼の言う「記号」を記号一般と取り違えるとき、直観的認識の本性も誤解されてしまう。そこで『入門』以外のベルクソンの著作も採用しながら、彼の「記号」概念を明らかにしよう。ベルクソンの言う「記号」は、おおよそ以下の四つの特性をもっている。

(a) 行為の表象：ここでも基本にあるのは、有用性という概念である。記号とはまず第一に、事物に対するわれわれの行為の表象である。「これら概念の諸要素はもはや事物の知覚そのものではなく、知性が事物の上に自らを固定する行為の表象である。それゆえこれはもはやイメージではなく記号である」(BC, 161)。言い換えれば、記号とは、われわれが事物をどう扱うか、事物からわれわれがどんな利益を引き出すことができるかを告げる表現である。ここで言われている、記号（あるいは一般に言語）と行為との密接なかわり合いは、いわゆる言語行為だけを問題にしているのではない。つまり、命令や警告といった言語表現にだけ当てはまることではないのである。ベルクソンは、記述的な表現のうちにも行為への促しを読み取る。言語は、将来の行為に役立つように事物の特徴を記述するのである (PM, 86)。以下の三つの特性は、この有用性という特性から導き出される。

(b) 固定性：事物に対して有効に働きかけるためには、そこに行為の支点を見出さなければならない。そのためには事物を固定した相のもとに捉える必要がある。ここから進行を本質とするものも、固定的に把握し表現しようとする傾向が生れる。進行を本性とするものを固定的に表現する概念を、ベルクソンは記号と呼ぶ。したがって、持続を空間的に（例えば、並列によって）表象する概念はこの意味での記号である。例としては、ある決心にいたる心的過程を表現する曲線図形を挙げることができる。「じっさい、この図形は、われわれの心的活動を空間のうちにもまさに二重化したものであるから、まったく記号的なものであり、そうである限り熟慮が終り、決心がなされたという仮定に立つときにしか描くことはできないだろう」(DI, 135)。この場合、進行ではなく進行が完了した時点で身をおき、そこから振り返って進行の全体を一挙に提示したものが記号的表象である。言い換えれば、出来つつある

もの (se faisant) を出来上がったもの (se fait) によって表示する装置が記号なのである。以上の論点を要約すれば、「記号の一般的条件」とは「実在の固定した相を静止した形式のもとに書き留めること」である (BC, 328)⁶⁾。

(c) 共通のもの：第三に、複数の対象に共通のものを表現するという特性を挙げることができる。「記号や観点は、(…) この人物から、他の人物と共通しているところしか私に引き渡してくれない」(PM, 179)。ある事物に対して有効に働きかけるには、その事物と以前出会った他の事物に共通する点に着目しなければならない。この共通点は任意のものではなく、ほとんどの場合、事物がわれわれに与えてくれる共通の効用である。共通の効用をもつものは、同じ言葉のもとに分類される。共通の効用に基づく分類を表す言語表現、これがここで言われている記号である。この分類は、事物に即した分類ではなく、事物とわれわれの行為との関係に基づく分類であるから「実在の分節 (PM, 23)」を歪めてしまう。

(d) 努力の省略：記号は、認識の際にわれわれに要求される努力を省いてくれる。「記号は記号化される対象に取って代り、そしてわれわれからいかなる努力も要求しない。」(PM, 186)。なぜなら、記号は事物に対する既成の有効な観点を表現するからである。「努力せずに理解するとは、すでにあるものを使って新しいものを再構成することである」(PM, 31)。この場合の「記号」は、既成の概念と同義に使われている。これと対照的に直観は、既成の概念による分類を新たに編成し直す営みであるから、まさに努力を要求する。

以上のように、ベルクソンは「記号」という語に限定された特殊な意味を負わせている。それゆえ、われわれは「形而上学は記号なしですまそうとする学である (PM, 182)」という言明を、記号一般を排除する宣言とみなすことはできない。記号とはわれわれの実用的利害のために作られ、対象を固定した共通の相のもとに捉らえ、認識のための努力をわれわれに要求しない表象の別名なのである。直観が拒否するのは、このような記号に限られる。逆に、ここからベルクソンが要求する直観的認識の一般的な姿も浮び上がってくるだろう。すなわち直観的認識とは、実用的観点によらず、対象をそれ固有の流動的な相において捉らえる認識、それゆえ、たえず新たな努力を要求する認識である。

(3) 社会的概念

本節冒頭の定式で述べられていたように、直観的認識は概念によらない。しかし、この場合もベルクソンが拒否したのは概念一般ではなく、つねに「社会的概念」、「社会生活に有用な概念 (PM, 91)」であった。社会的概念とは、言い換えれば、「日常的観念、すなわち社会的思考の保管者である言葉 (PM, 90)」である。このような概念は社会にとって便利であるように、すなわち人間の共同作業を円滑にするように現実を区分する。しかし、社会的概念

がおこなう、共同生活には有用な現実の区分は、実在の認識に適した区分であるとは限らない。事実、社会的区分は、しばしば共同生活にとって無用な区別を無視し、有用な類似を強調する (R, 116) (あるいは逆に無用な類似を無視し、有用な区別を強調する)。こうした区分、分類を認識の場面にそのままもちこむとき哲学的疑似問題が生じる。

こうした社会的概念の例は「魂」である。「社会が魂について語る時、おそらく内的経験のある示唆を追っているのだろう。しかし、社会がこの語を考案したのは、他の語と同様、社会の便宜からでしかない。社会はこの語によって身体からきっぱりと区別されるあるものを指示する。」(MR, 281.)。ここでは、魂は身体否定として、身体は魂の否定として規定されている。社会的概念の顕著な特徴の一つは、このような截然とした区別にある。概念が人々の間で円滑に、そして迅速に流通するには、はっきりした輪郭が要求されるからである。有用性に基づく社会的概念や記号は、日常生活で使用される限り、無害であるし目的にもなっている。しかし、「非常に多くの場合、言語を通して哲学者が社会から(既成の形で)受け取った観念は、この種のものである」(MR, 282)。実用を目的としない哲学においては、こうした概念や記号を無自覚に取り込む結果、混乱が引き起こされる。したがって、厳密に言えば、ベルクソンが批判するのは社会的概念や記号そのものではなく、それを認識の場面に無批判にもちこんでしまうことである。

(4) 言葉からの解放

以上のように、「記号」や「概念」という語は限定された意味で使われている。ここから容易に推測されるように、ベルクソンの直観は、有用性に汚染されない記号や概念なら排除しない。それどころか、直観も最後には概念に宿らなければならない、とさえ述べられているのである (PM, 31)。しかし、次のような文に出会うとき、ベルクソンの直観はやはり言語によらない認識である、という解釈が妥当であるように思われるかもしれない。「遅かれ早かれ、言葉から解放される哲学もまた発達するだろう」(PM, 88)。しかし、ここで次の二点に注意しなければならない。まず、この文が登場する文脈では、科学こそ第一に「言葉からの解放」を成し遂げた学であるとされている。次に、ここで言われている「言葉」とは(記号や概念がそうであったように)われわれの日常生活において社会に流通している言葉である。科学は「言葉をそれより適切な記号で置き換える (PM, 89)」ことによって、日常の言葉から解放され、その結果日常語に比べて「より精密な記号によって表わされた正確な認識 (PM, 88)」になったとされる。たしかに哲学は言葉から解放されると言われているが、それは科学がそうしたように、日常語が表現する功利的認識からの脱却を目指すべきだという意味なのである。それゆえ、哲学は、科学と違って日常語を記号で置き換えるのではないに

でも、「より精密な表現による正確な認識」を目指すはずである。以上から明らかなように、哲学が目指す「言葉からの解放」とはまず第一に言語一般からの解放ではなく、実用のために作られた日常語からの解放である。第二に、言語以外の何ものかへの解放ではなく、「より精密な表現」への解放である⁷⁾。

以上のように、ベルクソンが拒否するのは実用のために作られた記号や概念あるいは日常語である。では、有用性に奉仕しない記号や概念はありうるのだろうか。言語には実用的認識ではない思弁的認識に適した道具は備わっているのだろうか。もし言語の中にそのような道具がなければ、ベルクソンの直観は、結局のところ非言語的な営みにならざるをえないだろう。しかし実は、言語（そして知性）は徹頭徹尾有用性に奉仕しているのではない、とベルクソン自身考えていたのである。「直観のこの非常なわずかな部分が拡張されて、詩を、ついで散文を生み出し、最初は記号でしかなかった言葉を芸術の道具に転換したことも認めよう」(PM, 87)⁸⁾。言語は実在の動きを凝固させ、固定するばかりではない。言語もまた（その生命は完全なものではないが）生きている。「われわれは言語のうちに何かしらわれわれの生を生きるものを感じる」(R, 99)。この一文から明らかなように、ベルクソンは言語の中にも、たとえ不完全であるにしても生きたものがあると考えていた。したがって、直観を言語によって（近似的に）表現することは不可能ではない。言語や概念から離れなくても、実用的認識から逃れることはできるのである。

以上の考察から、ベルクソンの直観とは、哲学に密輸入された実用的認識を退け、実在の分節に合った概念を見出す営みであると言える。そこで次に、哲学に無自覚に取り込まれたこのような実用的思考法の治療例をいくつかの型に分けて検討しよう。

2. 実用的思考の治療

上で検討したような社会的、実用的思考様式の特徴として、次の二点を指摘することができる。第一は、事物の分類にかかわる。すなわち、実用的思考は、(a)二つの存在者が同じ本性をもつにもかかわらず、本性を異にするかのように扱う場合がある。(b)逆に、本性的に異なる概念を同じ名で呼ぶ場合がある。(a)の例としては「無意識」の概念を、(b)の例としては「人類愛」の概念を挙げることができる。(a)の場合には認識論上の同等性を回復し、(b)の場合には本性的差異を見出すことが実用的思考の治療になる⁹⁾。この場合、直観的認識は、概念ないし分類の編成変えをおこなうと言えるだろう。社会的思考法の第二の特徴として、中間物を容れない排他的な二項対立が挙げられる。この場合、言語による実在の実用的歪曲から逃れるには、対立する二項を何らかの形で移行させることになるであろう。次にこうした

治療がどのようになされているかを一つ一つベルクソンの著作の中から浮彫りにしてみよう。

(1) a. 無意識

ベルクソンは、ウィリアム・ジェイムズへの手紙（1903年3月25日）の中で、ジェイムズが『物質と記憶』（以下、『記憶』と略記）について指摘した困難を認め、そのうえでこう述べている。

「しかし、これらの困難の中には、われわれの精神が身につけた習慣に由来するものがあると私は思います。これらの習慣はまったく実践的な起源をもつので、思弁のためにはここから逃れなければなりません。例えば、現存すると同時に無意識的な記憶を認めることの困難がそうです。もしこのような記憶を事物になぞらえるなら、現存と不在の間に中間がないことは明らかです。（…）」

しかし心理学的実在の世界で、「あるかあらぬか」の二者択一をこのように厳密におこなう余地があるとは私には思われません。」(M, 588)

ここで触れられている、無意識的記憶をめぐる論述とは以下のようなものである(MM, 156-66)。われわれは、外界の現に知覚されていない領域（隣の部屋とか表の通りなど）が存在することを日常的には少しも疑わない。それに対して、現に意識されていない心的内容、例えば記憶は、このような確固とした実在性をもっているとは思われない。つまり、われわれはふつう、外界の知覚されない領域の実在性と、心の意識されない領域の実在性に対して非対称的な態度をとっている。

しかし、この非対称性は次のような実践上の理由から導き出されたものでしかない。外的対象ははっきりと定まった秩序にしたがって配列されているので、次にどんな対象が現われるかが容易に予測される。われわれはこの定まった秩序を実体化し、実在性と同一視する。なぜなら、そのような秩序はわれわれの行為を確実に導いてくれるが、われわれにとって自分たちの行為に有用なものこそ、確固とした存在をもつと思えるからである。こうして外界の知覚されていない対象の場合、その秩序およびわれわれの行為との密接なかわりが対象に実在性を与えている。これに対して、記憶が現われる秩序は一見したところ気紛れで偶然的であるとしか思えない。また、現在なすべき行為にとって記憶の大部分は無用なものであるから、そのような記憶が意識に現前しても行為を妨げるだけである。そこで実践上、われわれの行為は記憶を現在の意識から遮断する。こうして、意識されない記憶は、外界の知覚されていない領域のような実在性をもたないという錯覚が生れる。したがって、両者の非対称性は「まったく実益や生活の物質的要求にかかわるものである」(MM, 160)。ここでは実用的思考が、まさに無用な類似を消去し有用な差異を強調している。「それなのに、この区

別はわれわれの精神の中でしだいにはっきりした形をとって、形而上学的区別になってしまおう」(ibid.)。

しかし、このような実用的観点から排除すれば、現に意識されていない記憶も、知覚されていない外界の対象とまったく等しい実在性をもつことが明らかになる。第一に、記憶は存在しなくなったのではなく、無力になった、すなわち現在の行為にかかわらなくなったにすぎない。第二に、外界の場合だけ厳密な秩序があるように見えるのは、これもやはり行為の要求から生じる錯覚にすぎない。外界のある対象に達するには、われわれとその対象の間にある対象を一つ一つ越えて行かねばならない。これに対して記憶の場合には、介入する時間的間隔を一挙に飛び越えて現在の行為に役立つ記憶が再現される。こうしたことから、記憶は外界の対象のような秩序をもたないように思われる。が、実際には記憶もやはり秩序をもっている。「われわれが決断するときつねに顔を出すわれわれの性格は、われわれの過去全体のまさに現実的総合である。この凝縮された形では、われわれの先立つ心理生活はわれわれにとって外界以上に実在する」(MM, 162)。われわれの記憶にそなわる秩序ある全体とは、われわれの過去全体が「性格」という形で総合されたものなのである。

以上から明らかのように、記憶が存在しなくなったように見えるのは、記憶が単に行動の文脈からはずれているからにすぎず、その秩序の偶然性も見かけのものでしかない。それゆえ、意識されない記憶と知覚されない対象の間に、実在性の点で差はないのである。

しかし、非対称性が実用的観点から導き出されたものであることを指摘するだけでは、有用性に向けられたわれわれの思考習慣は改まらない。実在の分節を辿りなおすには、意識されない記憶と知覚されない外界とは、認識論的観点からすれば、ともに無意識的存在者であることを示さなければならない。これは「無意識」という言葉の新しい用法である。この観点からは、外界の対象も意識に与らない存在者ではなくなる。しかし、この考えの意味するところを十分明らかにするには、上の手紙で示されていたもう一つの点、すなわち心理学的実在には現存と不在の二者択一は成り立たない、という洞察を検討しなければならない。これについては以下で〈度合い degré〉の概念を扱うときに取り上げることにする。

(1)b. 人類愛

これは無意識的記憶とは逆に、本性上の差異を回復する事例である。われわれの日常語では「家族愛」、「祖国愛」、「人類愛」はすべて愛という共通の言葉で呼ばれ、それがしだいに外延が大きくなる言葉、「家族」、「祖国」、「人類」によって修飾されている。このような日常語を無批判に取り込むと、家族愛、祖国愛、人類愛は、愛という点で共通の本性をもっており、ただ対象の外延がしだいに広くなるという点だけが違うという誤解が生れる。しかし、

ほんとうは最初の二つと最後の人類愛とは本性を異にしている。家族愛と祖国愛は憎悪を排除しないのに対して、人類愛は憎悪とは両立せず、その対象は人類を越えた先にあるからだ。日常生活において流通している言葉の指示に従う心理学は、三者を同じ「愛」という項目のもとに分類する(MR, 34-5)。これに対して、実在の分節に即した分類は、家族愛、祖国愛の二者と人類愛の間に、上のような理由から本性の差違を立てる。三種の愛の本性的差異に気づかないことは、日常語の指示に従うことから生れる理論上の誤謬の典型例である。この例から分るとおり、日常語は、「実在には大きすぎる(PM, 1)」のである。

(2) 二項対立の融和

(a) 拡がりの度合い *degrés de extension* : 社会的概念の第二の特徴は、妥協を容れない二項対立にある。二項は、各項がすでにでき上がった概念として不動の輪郭を備えているとき、排他的に対立し合う。これに対して、ベルクソンはしばしば二項を〈度合い *degré*〉という概念によって関係づけようとする。その代表例は〈拡がりの度合い〉に見ることができる。ベルクソンによれば、一方に延長(物質)を置き、他方にその否定である非延長(精神)を置いて実在を二分するのは、つねに截然とした区別を求める実用的思考がもたらす理論的誤謬である。われわれの精神も完全な非延長ではなくさまざまな度合いで〈拡がり *extension*〉に与っている。ここで言う拡がりとは、具体的知覚に与えられるような、質を備えた延長を意味する。拡がりを備えない純粹記憶から、ある程度個別化された記憶イメージを経て、知覚に与えられるイメージに至るまで、精神はさまざまな拡がりの度合いをもつ。また物質の本性も、まったく質を欠いた延長ではなく、われわれの知覚に与えられるような質を弛緩した形で備えた〈拡がり〉であるとされる¹⁰⁾。

この〈拡がりの度合い〉という概念は、次の二つの理由からベルクソンの直観的方法を例示していると考えられる。第一に、この概念によって社会的概念のもたらす二項対立が解消される。身体ないし物質は質を備えた延長であるという点で精神に近づき、また精神の方も純粹な非延長ではなく拡がりのさまざまな度合いをもつ点で物質に歩み寄るからである。〈拡がり〉の概念は、すでに触れた「魂」という概念と対照的である。「魂」は身体の否定として捉えられていた。二項を互いに相手の否定として規定するとき、両項の関係をそれ以上記述することはできなくなってしまう。

第二に〈拡がり *extension*〉は、直観によって生み出される新しい概念の一つであると考えられる。実在の分節を辿りそれを表現するには、本節の(1)で検討したように既成の概念や分類を再編成するだけでなく、端的に新しい概念を作り出すことも有効な手段である。デカルトが物質の本性を「延長」であるとしたのに対して、ベルクソンは「拡がり」であるとす

る。〈拡がり〉という概念を創造することによって、それまで混同されていた延長と物質とが分離され、精神と物質の対立の緩和が試みられているのである。

(b) 存在の二条件：ベルクソンが調停しようとした最も代表的な二項対立は、主観と客観のそれであろう。すでに無意識、拡がりの度合いもこの点にかかわっていた。彼は存在者を心的なものと物質的なものに載然と区別するのは悟性の錯覚であると考えている。この錯覚を暴くために、心的であれ物的であれ経験的存在者が存在すると言えるために満たすべき二つの条件が指摘される。すなわち、①意識への現前と②このように意識に現前するものが先立つものや後に続くものと結び論理的、あるいは因果的結合である。ところでわれわれの悟性はずねにきっぱりした区別を立てることを機能としているので、外的対象の存在条件はもっぱら②にあり、心的存在者の存在条件はもっぱら①にあると考える。しかし、この二条件は度合いを認める。外的対象の場合には②が優勢であり、心的存在者場合には①が優勢であるが、どちらの場合にももう一方の条件もまた部分的に満たされている。ここで、『記憶』の序でなされた(MM, 1)、イマージュとは観念論者の表象と实在論者の事物の中間に位置する存在であるという言明の十全な意味が明らかになる。实在論者の言う「事物」は条件①を部分的に満たすことによって、観念論者の表象に近づく。観念論者の言う「表象」も条件②を部分的に満たすことによって、实在論者の事物に近づく。こうして事物と表象は存在の二条件を異なる度合いで満足するという点で、ともに「イマージュ」という共通の名で呼びうるようになる。以上のような手続きによって、主観と客観の対立の緩和が企図されているのである。

さらに、以上の考察を根拠にして、ベルクソンは「無意識」という語の通常の外延を拡張し、知覚されない外的対象をも「無意識的な」存在者とみなす。外的対象は上のように、条件①を部分的に満たすことによって意識的なものの性質（すなわち意識への現前）を分有する。ここから、知覚されない対象は意識の外にあるが、しかし意識と無縁ではない存在者として「無意識的なもの」と呼ばれるのである。「無意識的なものは、どちらの場合にも同じ種類の役割を果たしている」(MM, 161)。こうして「無意識」は心的存在者だけでなく、物的存在者にも適用されるという新しい用法を与えられる。そして、このように両項を対称的に把握することによって、両項の相互排他的な関係は度合いを容れる関係に置き換えられるのである。この点でも、存在の二条件の考察は、『記憶』第一章のイマージュ論を補強する。イマージュとは、その総体としては、中和化され、互いに打消し合う潜在的意識であるとされていたからである¹³⁾。

3. 逆転された問い

以上で、ベルクソンの直観が実用的思考をいかに治療するかを具体例に即して検討した。ところで、そもそもある哲学的な概念、言語表現、思考法が実用性に汚染されていることをわれわれはどうやって知るのだろうか。それは実在と言語を介さずに接触することによって、すなわち神秘的直観によってである、という答えがここでまた頭をもたげてくる。しかし、そうではない。実用性による汚染の徴表は哲学的疑似問題によって得られる。解決がきわめて困難な哲学的問題に乗り上げたとき、われわれはその問題を構成している用語、問題そのものの立て方などを検討して、実用性の汚染を洗い出す。そして適切な用語で、適切なしかたで問題を新たに立て直すのである。そして、直観によって実在を把握することの徴表は、問いの解体と立て直しによって得られる¹²⁾。次の直観によるそのような問いの立て直しの例を見よう。

実用的思考から脱するために直観がとることのできる道は、前節で検討したような分類や二項対立にかかわる方策に尽きるものではない。ベルクソンは、直観的認識へ至る第一歩は有用性を目指す思考の習慣を逆転することである、と述べている (PM, 198)。このような思考の逆転は、従来のベルクソン解釈では、有用性を目指す方向から、生命や持続の流れの方向に注意を転じることだとされてきたようである¹³⁾。この解釈に異論はないが、では具体的にどのような作業が思考に課せられるか、この解釈は教えてくれない。私は、このような思考の逆転は、仮に「問いの逆転」と名づけられる営みに具体化されると考える。立て方を誤まったために混乱を引き起こしている問題、あるいは解決しようのない問題を正しく立て直すには、問いの立て方をいわば逆にすることが有効な手だてとなるのである。その例として、次の問いをあげることができる。「したがってこの [既視体験の] 場合、心理学の主要な課題は、いかにしてこれこれの現象が病人に生じるかを説明することではなく、なぜその現象が健康な人には認められないかを説明することであろう」(ES, 127 [] 内は引用者)。ふつう、病理現象とは正常な状態につけ加わった新たな現象であると考えられる。言い換えれば、病態には正常な状態「より多くのもの」があると考えられている。ここから自然に「この病理現象はどうやって生じたのか」という問いが立てられる。ベルクソンはこの問いを、いわば逆転する。つまりある種の病理現象（この場合、既視体験）は、正常な状態では抑圧されていたものが表に現われただけであって、新たにつけ加わったものではないと考えるのである。何かが付加されたのではなく、障害が取り除かれたのであるから、病態は健康な状態「より少ないもの」とみなされる。こうして、逆転された問い、「なぜこの病理現象は健康人

には認められないか」が立てられる。

これはベルクソンにしばしば見られる思考の型であって、彼の直観の重要な側面を表わしていると考えられる。他の例をあげれば、表象は物質の存在につけ加わるもの（より多いもの）ではなくて、そこから生体の利害に関わらない作用を引いたもの（より少ないもの）である（MM, 31-6）。事物の表象にはその存在「より多いもの」が含まれると仮定すると、「意識はいかにして発生したか」という提起の仕方のまづい問題が立てられる。意識はイメージの総体という潜在的な、中和化された形ですでに与えられているのだから、意識を発生させる必要はない。意識はつけ加えられるのではなく、取り出されるのである。つまり事物の意識的表象は、その存在「より少ないもの」である。それゆえ「潜在的意識はいかにして現実的意識になるか」あるいは「知覚はいかにして自己を限定するか」が正しく提起された、したがって解決可能な問題である。直観的認識の課題は、こうした逆転された真の問題、すなわち解決可能な問題を（発見ではなく）発明することにある。

ところで『ベルクソン哲学』の中でドゥルーズは、より多いものがあるところにより少ないものがあると誤認するために疑似問題が生じるという洞察を、方法としてのベルクソンの直観の重要な側面の一つとして挙げている¹⁴⁾。しかし、問いの逆転というわれわれの見地からすれば、これは事柄の半面でしかない。逆に上のように、ほんとうはより少ないものがあるところにより多いものを見ることによっても疑似問題は生じるのである¹⁵⁾。

4. 結 論

本稿が出発した問いは、ベルクソンの直観は厳密に何を拒否するか、であった。ベルクソンの直観が拒否するのは、有用性に汚染された概念、言語、記号のみである。直観の営みは、有用性に汚染されない概念の発明に、すなわち「実在の分節」を表現する概念の発明にある。有用性による汚染の徴表は、哲学的疑似問題によって得られる。実在の分節の再発見は、ひとつには本性的類似と本性的差異の回復によってなされる。そのような類似と差異を表現するために直観は、ときには従来の概念を拡張し（「無意識」）、ときには新しい概念（「拡がり」）を創造しつつ、旧来の分類を再編成する。疑似問題の解消はまた、問いの逆転をおこなうことによってもなされる。

本論で浮彫りにされたのは、ベルクソンの直観の全体像ではない。とりわけ、もう一つの重要な側面である「共感」としての直観を論じることはできなかった。さしあたっては、共感としての直観をも、実在の分節をたどる概念を産出する営みとして同様に扱えるかどうかが課題となるだろう。予想を記しておけば、共感としての直観もおそらく言語と無関係な感

情的一体化ではなく、言葉のリズムによって対象の持続のリズムを「再構成」ないし「再創造」する営みとして捉らえることができるのではないだろうか。しかし、この点の考察は後の論稿に委ねることにしたい¹⁰⁾。

ベルクソンの著作からの引用略号は以下の通り。

- (DI) Essai sur les données immédiates de la conscience (1889)
- (MM) Matière et mémoire (1896)
- (R) Le Rire (1900)
- (EC) L'Évolution créatrice (1907)
- (ES) L'Énergie spirituelle (1919)
- (MR) Les Deux sources de la morale et de la religion (1932)
- (PM) La Pensée et le mouvant (1934)
- (M) Mélanges, P. U. F., 1972

注

- 1) Alston, W. P. *Philosophy of Language*, Prentice-Hall, 1964, p. 5 [邦訳, W. P. オルストン, 『ことばの哲学』村上陽一郎訳, 培風館, 1968年, 8 ページ。]
- 2) Verdenal, Rene. 'La Philosophie de Bergson', *Histoire de la philosophie* VI, Hachette, 1973, p. 252.
- 3) Emmet, Dorothy, 'Language and metaphysics: introduction to a symposium'. *Theoria to Theory*, 1977, Vol. 11, p. 50.
- 4) この点については『物質と記憶』第一章を参照。またすでに見たように, 内的知覚も同様に歪曲を受けている。
- 5) 直観とは対象との合致であるとも述べられている。しかし, 認識行為は主体と対象の区別を含蓄するのだから, このような表現は「あまりに強すぎる」とするコワコフスキーの評言に, 私は同意する。Kolakowski, L., *Bergson*, O. U. P., 1985, p. 36 を参照。
- 6) ここで次の点に注意しなければならない。持続の空間的表象は記号であるが, バリエントが指摘するように, すべての空間的表象 (ないし一般に言われる記号) が (ベルクソンの言う) 記号ではない。空間的本性をもつものに対しては, 空間的表象は妥当である。それゆえ, 空間的な表象 (ないし記号) を「記号」にするのはその表象が空間的であるということではなく, 持続と幾何学図形の場合のように, 対象と記号が本性を異にするという事実である。空間的本性をもたないものに適用される時, それは記号になるのである。例えば, 軍隊の行程を表現する蛇行する線分は, この意味での記号ではない。どちらも同じ空間的並列関係を共有しているからである。Pariante, J.-C., *Le Langage et l'individuelle*, Librairie Armand Colin, 1973, pp. 17-8.
- 7) さらに科学は, 保守や安定ではなく革新を目指すという点でも日常の言語とは異なる。そしてこの点でも哲学は科学と相似している。日常の言語は保守と安定と目指す。会話 (conversation) の本質は, 保守 (conservation) である。これに対して, 科学と哲学は既成概念をたえず問い直す (PM, 86-92)。まさにこの理由から, 直観的哲学は, 固定性を目指す「記号」を退けるのである。
- 8) ベルクソンは直観の営みを芸術活動になぞらえている。ただし, 哲学の場合はイメージを越えてゆくという点と知性を援用するという点が芸術と異なる。(cf. M, 1148)
- 9) 本性的差異を見出す方法は, ドゥルーズが方法としての直観の第二の規則として挙げている。Deleuze, G., *Le Bergsonisme*, P. U. F., 1968, p. 11. われわれがここで挙げている本性的 (差異ではなく) 類似の回復を, 彼が直観の規則として挙げていないのは, ベルクソン哲学を差異の哲学と見る彼の立場からは当然の帰結であろう。
- 10) 拡がりの度合いの立ち入った考察については, 以下の拙稿を参照。「ベルクソンの拡がりについて」(『年報人間科学』第6号, 大阪大学人間科学部, 社会学・人間学・人類学研究室, 1985年, pp. 97-111.)
- 11) 『創造的進化』にも無意識をめぐる同じ趣旨の考察がある。そこでも特徴的なことは, ベルクソンにとって意識の「無」はありえないという点である。意識は相殺することはあっても, 欠如することはない。(EC, 144-5)
- 12) 「直接的なものがもつこの力, すなわち問題を消し去ることによって対立を解消する能力は, 私の考えでは, 真の直観を見分けるための外的徴表である。」(M, 772)

- 13) 例えば、次を参照、Chevalier, J., *Bergson*, Plon, 1926, pp-92-3.
- 14) Deleuze, op. cit., p. 6. 無や無秩序, 可能性といった観念をめぐる問題がこのタイプの疑似問題の例である。
- 15) ただしこちらはドゥルーズの言う第二のタイプの疑似問題, すなわち提起の仕方がまずい問題である。(ibid.)
- 16) 「言語による直観への誘い」(仮題, 『年報人間科学』第11号, 1990年掲載予定) でこの問題を取り上げた。また, この論文と本稿, および「直観はいかにして表現されるか——ベルクソンの直観の表現へ至る歩み」(『年報人間科学』第10号, 1989年, pp.15-32) は, 直観とその表現をめぐる一連の論稿である。合わせてお読みいただければ, 幸いである。

Bergsonian Intuition and the Reorganization of Ordinary Concepts

Masayuki Nakamura

The most popular, but highly misleading formula of Bergsonian intuition is as follows: intuition is knowledge that is immediately known from the inside without reference to symbols or concepts. However, the key terms in this formula, such as 'immediately', 'from the inside', 'symbols' and 'concepts', must necessarily be interpreted from the view point of the notion of utility. The symbols and concepts Bergson refuted, for example, are not symbols and concepts in general, but utilitarian (therefore socially convenient) symbols and concepts only. Bergson considered that to use these utilitarian concepts in philosophy creates the philosophical pseudoproblems which are presented in wrong terms and inadequate ways. Thus Bergsonian intuition can be interpreted as precisely the process of reformation of concepts in our ordinary language which are contaminated with utilitarian modes of thinking. By this process, intuition recovers 'the articulation of reality'.

This process can be divided into three parts. First, (a) the recovery of the essential similarity of two modes of being, unperceived external objects and unconscious memory and (b) the distinction of two concepts which are essentially different, but ordinarily called by the same name, such as love for humanity and love for neighbor. Second, the reconciliation of entities that have been distinctly separated, such as mind and body. Third, the process which I call the inversion of questioning.

Bergsonian intuition is therefore not a process which refutes linguistic expression and mystically coincides with its objects, but the very pursuit of linguistic expression which can represent the articulation of reality. Throughout this paper, by making this particular process clear, I shall attempt to demystify the Bergsonian intuition.